

田園都市 (Garden Suburb) の計画とその住居形式に関する研究 (I) (梗概)

東京大学 香山研究室

イギリスの事例の分析

—— ハムステッド・ガーデン・サバークを中心にして ——

序

本研究は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて建設され、その後の近代都市計画や建築に大きな影響を及ぼしたと考えられる郊外住宅の計画とその住宅建築を、研究対象とする。本年度は、郊外住宅地発祥の地とも言えるイギリスにおける事例を、特にハムステッド・ガーデン・サバーク (Hampstead Garden Suburb, Middlesex 1906-) を中心にして論ずる。

ハムステッド・ガーデン・サバークでは、慈善事業家バーネット夫人の高邁な理想の下で開発が進められ、都市計画家アンウィンは従来の都市計画を打破する新しい提案を実現した。更に、ラッチェンス、ベイリー・スコット、パーカーとアンウィン等の建築家達によって、当時のイギリス建築を代表するような公共施設や住宅がここに建てられた。社会・経済的、都市計画的、建築的観点から見て、ハムステッド・ガーデン・サバークは当時のイギリスにおける郊外住宅地の最上のものであると言って過言ではない。ペブスナーがハムステッド・ガーデン・サバークは「20世紀の全ての田園郊外の中で、芸術的に最も満足ゆくものであり、社会的に最も成功したものである。」¹⁾と云う所以である。それはまた、労働者住宅改善、ユートピア思想、工業モデル、ヴィレッジ、田園都市といった諸運動の集大成であると考えられる。従ってハムステッド・ガーデン・サバークにおける都市計画、建築の分析は、単なるモノグラフに留まらず、当時の住宅問題をめぐる諸運動の考察にも連なってゆくものである。

第1章 ハムステッド・ガーデン・サバークの開発経緯及びその全体計画

本章ではハムステッド・ガーデン・サバークにおける開発の動機・対象及び開発主体という社会・経済面と、全体計画という物理面を歴史的に考察する。ハムステッド・ガーデン・サバーク開発にあたって、バーネット夫人を中心にして3つの組織が結成された。まず1903年6月に結成された「ハムステッド・ヒース拡張委員会」(Hampstead Heath Extension Council) は、ハムステッド・ヒースの地所323エーカーの内80エーカーを買収し、それをヒース拡張部として保護する組織である。又、

1904年5月に結成された「ハムステッド・ガーデン・サバーク・トラスト」(Hampstead Garden Suburb Trust) と、1906年3月それが改組されてできた会社「ハムステッド・ガーデン・サバーク・トラスト株式会社」(Hampstead Garden Suburb Trust Ltd. 以下「トラスト株式会社」と略記する)は、残る243エーカーの土地を買収し、その宅地開発を行なう組織である。但し、「トラスト株式会社」は宅地の所有、管理及び建設の監督を専らとし、個々の住宅建設は1906年7月に結成された「協同借家人株式会社」(Copartnership Tenants Ltd.) の手に委ねられた。しかし、この分業関係はサバーク拡張時に崩れ始めた。即ち、「新郊外」は「協同借家人株式会社」によって買収・所有され、その開発にあたっては「トラスト株式会社」の監督権が及ばなくなったからである。両者の土地所有権を現在の地図上で分類したのが図1である。A, Bが1907年から8年にかけて「トラスト株式会社」によって買収された「旧郊外」、C, D, E, Fが1911年に「協同借家人株式会社」によって買収された「新郊外」である。但しE, Fは後に「トラスト株式会社」の手に移り、それとGを足した部分が「トラスト株式会社」によって開発されたものである。

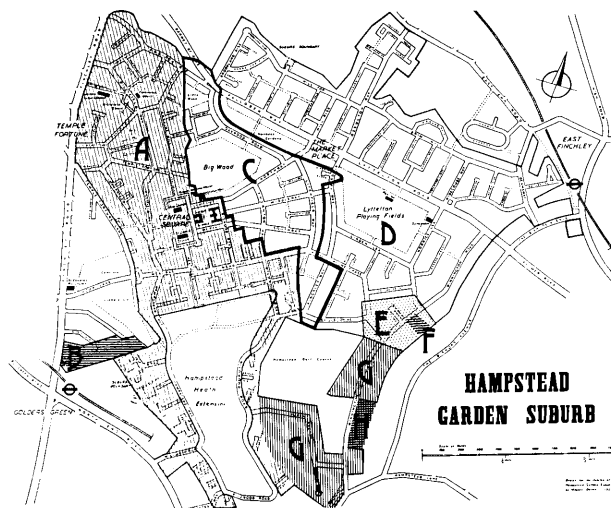


図1 ハムステッド・ガーデン・サバークの土地所有形態 (1957)

註1) N. Pevsner, *The Building of England, Middlesex*, Penguin in Books, 1951, p.59.

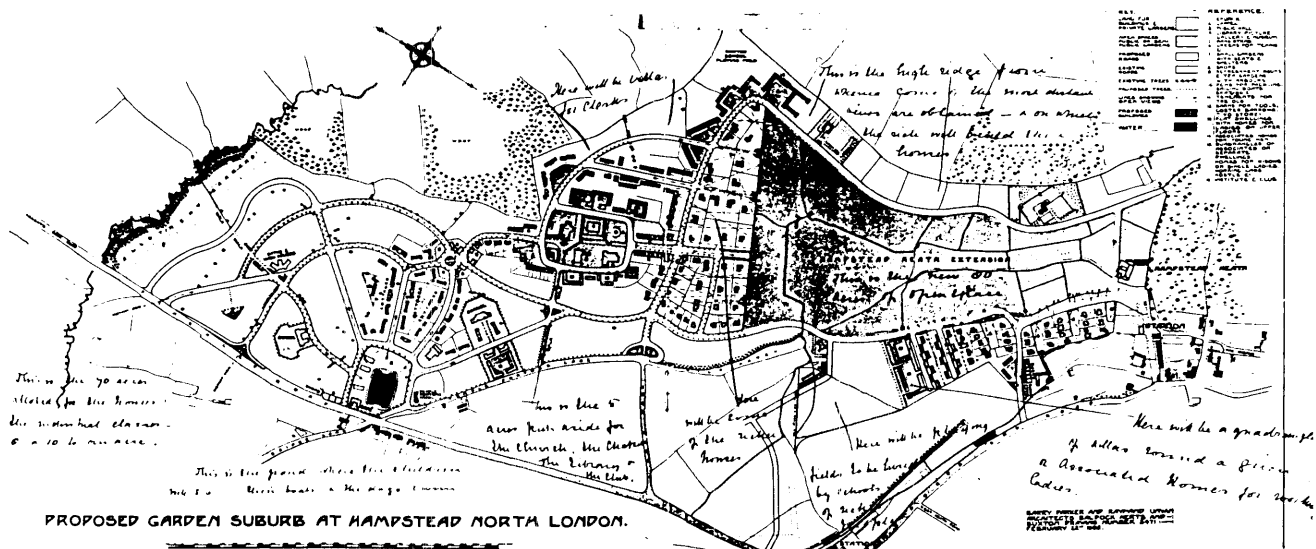


図2 ハムステッド・ガーデン・サバープのマスター・プラン, 1905

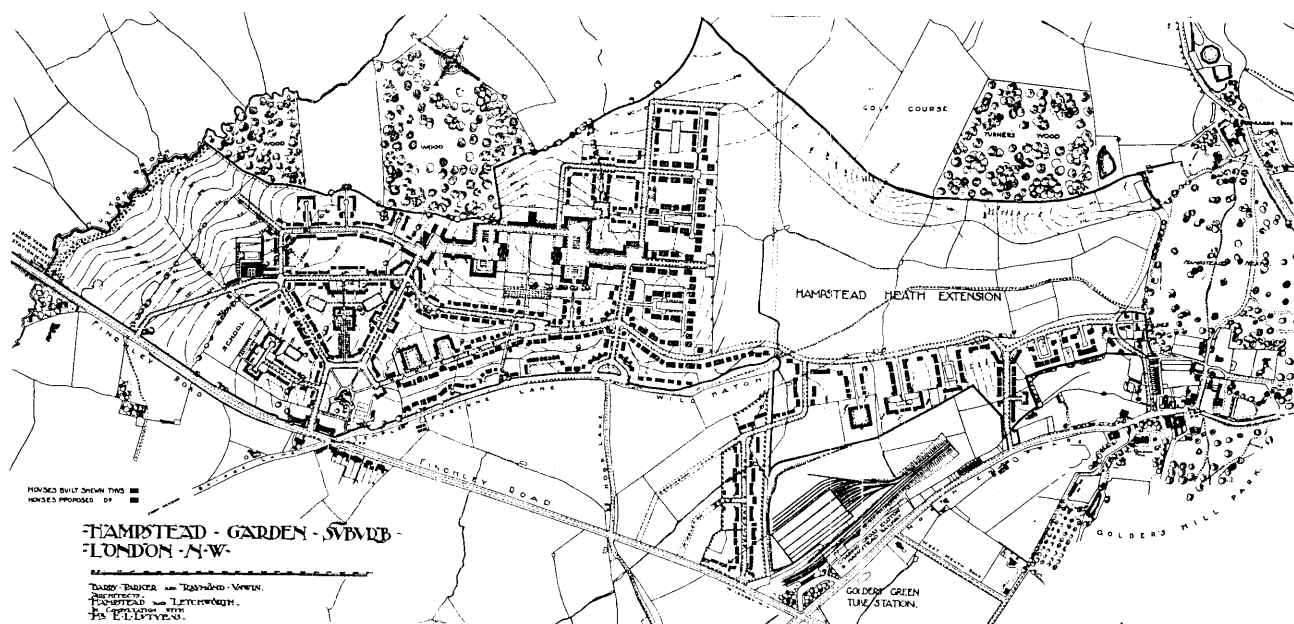


図3 ハムステッド・ガーデン・サバープのマスター・プラン, 1909

さて、ハムステッド・ガーデン・サバープの都市計画にあたっては、レイモンド・アンウィン (Raymond Unwin, 1863-1940) とエドウィン・ラッチェンス (Edwin Lutyens, 1869-1944) が協同した。1906年5月「トラスト株式会社」の建築家にアンウィンが、その顧問建築家にラッチェンスが任命され、アンウィンは敷地の調査及び全体計画、更に設計者の提出する図面の審査にあたり、ラッチェンスがセントラル・スクエアの設計を担当した。又、「協同借家人株式会社」の建築家にはサットクリフ (G. L. Sutcliffe, 1864-1915) がその顧問建築家にはアンウィンが任命された。ここではまずサバープの全体計画の変遷を4つの段階に区別して分析している。アンウィンによる1905年と1909年のマスタープラン図2、図3は、

「田郊外」の初期案と実現案であり、両者を比較してみると全体計画がインフォーマルなものからフォーマルなものに変化していることが読み取れる。即ち、敷地全体の地形に対するセンターや道路の位置関係は不変だが、そのデザインが曲線を用いたアシンメトリアルなものから直線を用いたシンメトリアルなものに変えられているのである。このような全体計画のフォーマル化とセントラル・スクエアのフォーマル化とは軌を一にしている。1905年のマスター・プランではヒースを見下す丘上に公共施設が不規則に配置されていたのだが、ラッチェンスはそこに文字通りの四角い広場、スクエアを計画した^{図4}。彼は丘に通ずる道路の軸上にセント・ジューデス教会と自由教会とを配し、その三方をインスティテュート

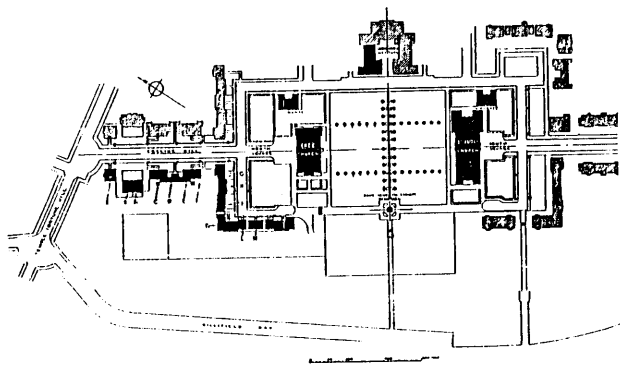


図4 セントラル・スクエア，ハムステッド・ガーデン・サバープ，ラッチェンス設計，平面図

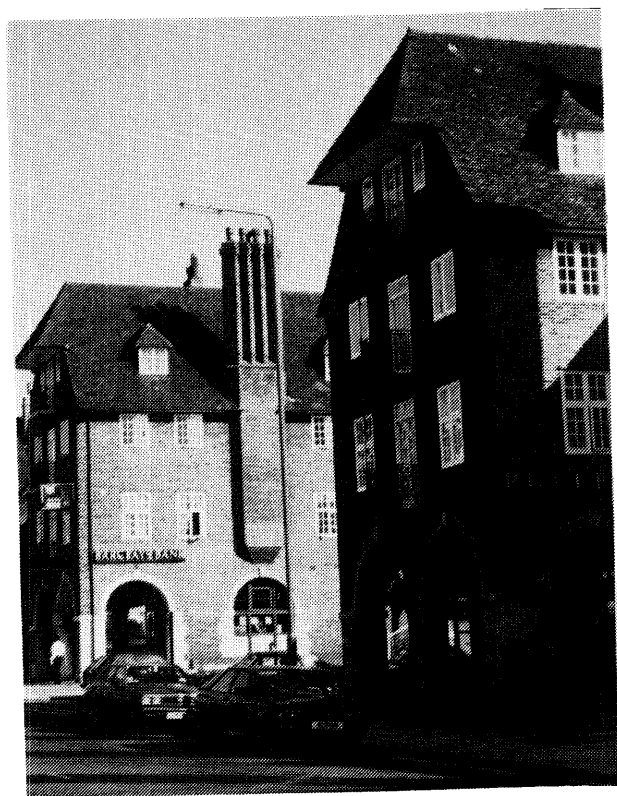


図5 テンプル・フォーチュン・ショップス，ハムステッド・ガーデン・サバープ，パーカーとアンウィン設計

と住棟で取り囲んで、「図」として限定された広場をつくりあげたのである。しかも、そのレイアウトのフォーマリティは、ネオ・ジョージアン様式という古典様式によって高められている。この宗教・教育の場としてのセントラル・スクエアとは別に、ショッピング・センターとソーシャル・センターがパーカーとアンウィンによって建てられた。ショッピング・センターは、サバープ西縁を走る幹線道路に面して建てられた2つの建物、テンプル・フォーチュン・ショップスであり、それらは対をなしてサバープ全体の「ゲート」を形成している^{図5}。ソーシャル・センターとは北側の丘上に設けられたウィリフィールド・グリーンとクラブ・ハウスである。ウィリフィールド・グリーンは不規則形ではあるが、クラブ・ハウスや住棟によって取り囲まれ「図」として限定された広場



図6 ハムステッド・ガーデン・サバープのマスター・プラン，1912

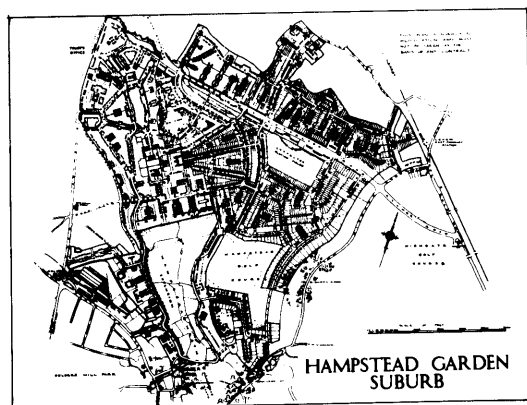


図7 ハムステッド・ガーデン・サバープのマスター・プラン，現状

であるという点ではセントラル・スクエアと同様である。アンウィンの都市計画上重要な概念である「ゲート」や「グリーン」は、それぞれ中世都市の市門や古い村落のヴィレッジ・グリーンから想を得たものと言われている。建築様式はレンガ造のヴァナキュラー様式であるが、そこにも中世ドイツ建築の影響が見られる。

1912年のマスター・プラン^{図6}は、「新郊外」に対するアンウィンの基本的な考えを示している。それと現状のマスター・プラン^{図7}とを比較すると、アンウィンのバロック的な「新郊外」計画が換骨奪胎されて実施されたことが読み取れよう。アンウィンがハムステッドを去り、「新郊外」が「協同借家人株式会社」のみにによって開発されたこともあって、アンウィンの意図した新・旧郊外の調和と統一は成就されずに終わったのである。

第2章 アンウィンの都市計画とその歴史的位置付け

本章では、ハムステッド・ガーデン・サバーブに至るまでのアンウィンの都市計画例を分析し、彼の都市計画理論の発展過程を追跡する。更にそうした理論の集大成とも言える主著『都市計画の實踐』(*Town Planning in Practice*, London, 1909) をまとめ直すことによって、アンウィンの都市計画理論を歴史的に位置付ける試みがなされている。

パーカーとアンウィンはハムステッド・ガーデン・サバーブ以前に、既に2つの都市計画を手がけている。ひとつはチョコレート企業の為の工業モデル・ヴィレッジ、ニュー・イアーズウィック (New Earswick, Yorkshire, 1901-)^{図8}であり、今一つは最初の田園都市、レッチワース (Letchworth Garden City, Hertfordshire, 1903-)^{図9}である。ここでは詳論は避けるが、要約するとニュー・イアーズウィックは曲線の環状道路の周囲に住棟が不規則に配置されたインフォーマルな計画であったのに対し、レッチワースはタウン・スクエアを中心にして直線の放射道路がとられたフォーマルな計画であったと言える。そして、このフォーマル化の過程がハムステッド・ガーデン・サバーブの全体計画におけるフォーマル化に呼応しているのである。又、レッチワースでは、「ハムレット」計画案 ('A Hemlet', 1901)^{図10}で試みられたクアドラングル型住棟配置が随所で用いられている。こうした不規則なクアドラングル型住棟配置のフォーマル化されたものがハムステッド・ガーデン・サバーブに建てられた。更に「都市近郊のコテージ群」 ('Cottages Near a Town', 1903)^{図11}で試みられた住棟の凹凸配置やイーリング・テナンツ・エステート (Earling Tenants' Estate) やレスター・アンカー・テナンツ・エステート (Leicester Anchor Tenants' Estate, 1907 図12) が見られるような交差点広場の手法も、ハムステッド・ガーデン・サバーブに受け継がれている。

以上のことから、アンウィンの関心がインフォーマル・デザインからフォーマル・デザインに移行していることが了解できる。だからといって、アンウィンはインフォーマル・デザインを完全に放棄したのではなく、実際インフォーマル・デザインとフォーマル・デザインの融合を志していた。彼は『都市計画の實踐』第二版序文で次のように述べている。「世界中の都市計画例を検討してみると、芸術的な都市計画の要諦とは、秩序だったデザインの自然なフォーマリティとそれと同じ程自然な敷地のインフォーマリティを融合して一つの創造をなすことにありと強く確信するだろう。」^{註2}そして、彼は自らの都市計画をアメリカン・ボザールのフォーマル・デザインとカミロ・ジッテを中心としたドイツのインフォーマル・デザインの融合として位置付けしているのである。

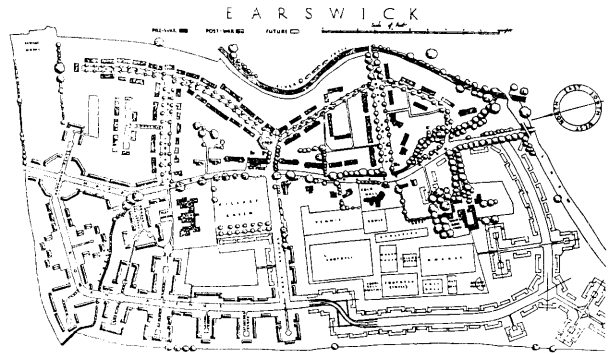


図8 ニュー・イアーズウィック、パーカーとアンウィン設計、1901

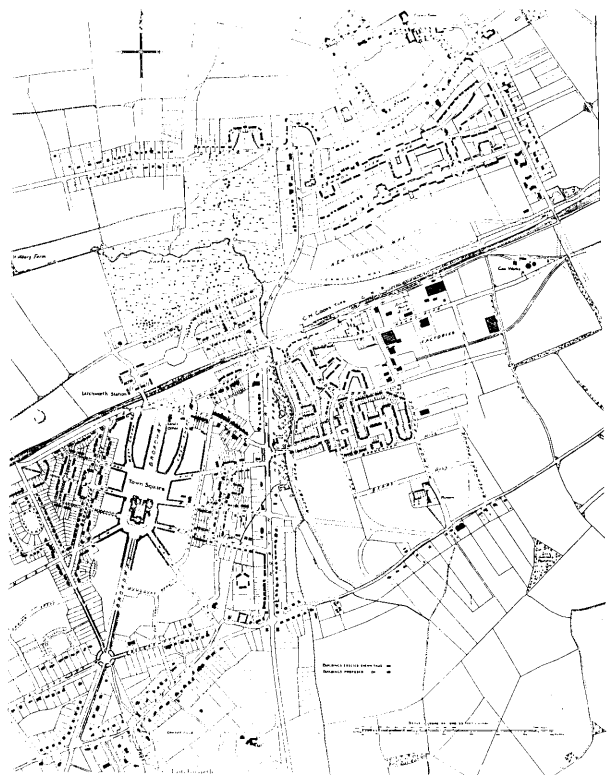
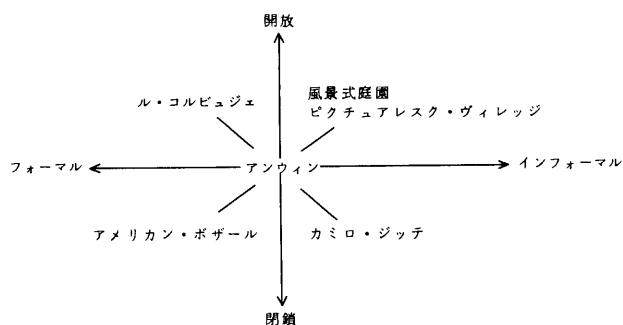


図9 レッチワース、パーカーとアンウィン設計、1903

一方、ラスムッセンは、アンウィンの都市計画を開放と閉鎖の融合と見做している^{註3}。ここで言う開放とは、建物が敷地に孤立して建てられ、建物の「図」的性格が強調される場合、反対に閉鎖とは、建物が連続して建てられ、それが図でヴォイド即ち広場や道路が「図」として限定される場合を言う。さて、こうしたフォーマル/インフォーマル、開放/閉鎖の二項対立を図示すると次のようになろう。

註2) R. Unwin *Town Planning in Practice*, London, 1909, second edition, 1934, p. xiv.

註3) S. E. Rasmussen, 'A Great Planning Achievement', *Town and Country Planning*, July, 1957, p.285.



次に、この表に基づいてイギリスの風景式庭園及びピクチャレスク・ヴィレッジの伝統、ドイツ派都市計画（カミロ・ジッテ）、アメリカ派都市計画（アメリカン・ボザール）がそれぞれアンウィンの都市計画に及ぼした影響を検討し、またアンウィンの都市計画とル・コルビュジェのそれとを比較して、アンウィンが近代都市計画に与えた影響を検討している。

本章最後では、こうしたアンウィンの都市計画理論を田園都市運動の中に位置付けると共に、ハムステッド・ガーデン・サバープが後の田園都市、ウェルウィン・ガーデン・シティ（Welwyn Garden City, Hertfordshire, 1919-）やウィゼンショウ（Wythenshawe Satellite City, Manchester, 1927-）に与えた影響を考察している。

第3章 パーカーとアンウィンの住宅

本章ではパーカーとアンウィンによる住宅作品を取り上げる。ここではまずパーカーとアンウィンの住宅に対する基本的な考え方を概観し、次に彼等の住宅作品の平面・立面構成の特色を、他の建築家の作品との比較を通じて抽出している。

パーカーとアンウィンは、モリス（William Morris, 1834-96）のアーツ・アンド・クラフツ思想から最も強い影響を受け、ヴァナキュラー様式を復興すると同時に、住宅内に中世ホールを復活させた。「丁度中世において大ホールが住宅の中心にあり、その回りに他の諸室が群がり従属していたように、現代の中流階級の住宅においても良いリビング・ルームをつくるのがまず必須であって、他の諸室もそれとの関係から考慮されねばならない。」^{註4} このようなリビング・ルームはサーキュレーションを兼ね備えた「通り抜けできるリビング・ルーム（through living room）」となるが、そこにはサーキュレーションに邪魔されないようなベイウィンドウやイングルヌックの凹みがつけられる。又、時としてこのイングルヌックに階段が組み合され、更にリビング・ルーム全体が吹き抜かれる場合もある。「ヒル・クレスト」（Hill Crest, Marple, Cheshire, 1896）^{図13}の大ホールがその好例であ

註4）Parker and Unwin, *The Art of Building a Home*, London, 1901, reprinted in W. L. Creese, *The Legacy of Raymond Unwin*, The MIT Press, 1967, p.49.

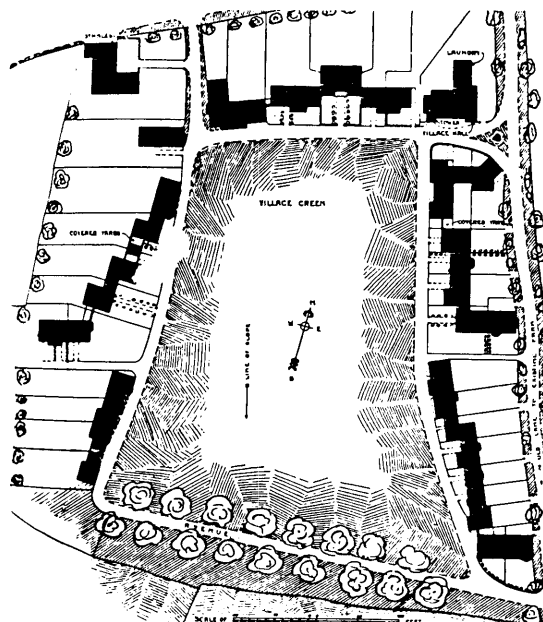


図10 「ハムレット」計画案、パーカーとアンウィン、1901

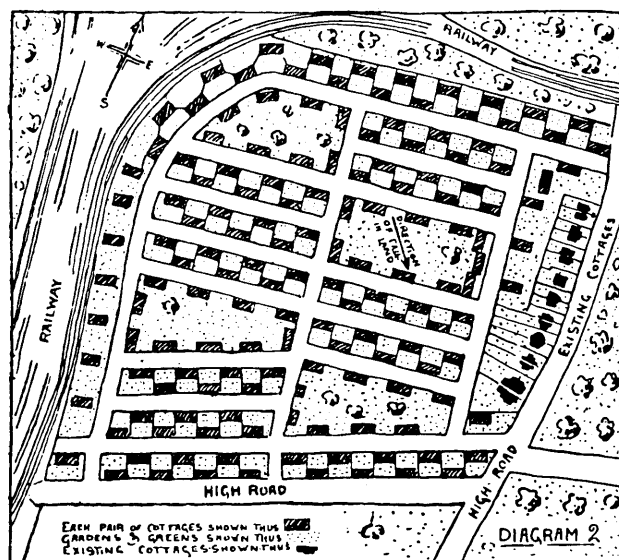


図11 「都市近郊のコテージ群」、パーカーとアンウィン設計、1903

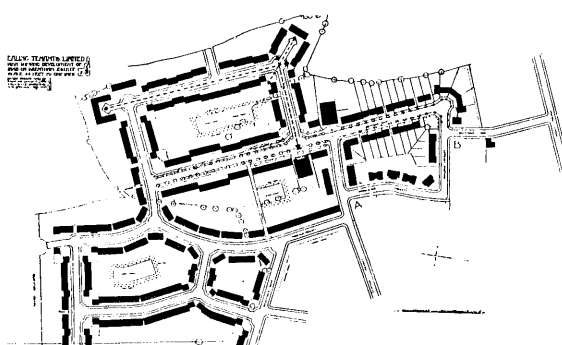


図12 イーリング・テナンツ・エステート、パーカーとアンウィン設計、1907

ろう。連続住宅の場合は吹き抜けこそ取られないが、「通り抜けできるリビング・ルーム」に様々な凹みが付けられている。「都市近郊のコテジ群」の住戸平面^{図14}にそれが端的に示されている。

しかしながら、このようなリビング・ルームの構成はパーカーとアンウィンの独創ではなく、ドメスティック・リヴァイヴァル（住宅復興）期の住宅において試みられたものであった。特にベイリー・スコット（M. H. Baillie Scott, 1865-1945）のリビング・ルームの構成が直接パーカーとアンウィンに影響をあたえることになったのである。

一方、パーカーとアンウィンは住宅における日照・換気の必要性を強調し、「裏、裏庭、裏路地の必然的な廃棄」^{註5}を主張した。1848年チャドウィック（Edwin Chadwick, 1800-90）等の努力によって最初の公衆衛生法が制度された結果、従来の「バック・ツー・バック」（back-to-back）形式の住宅は建てられなくなったが、それに代って「トンネル・バック」（tunnel-back）形式の住宅が投機的建設業者によって盛んに建てられるようになった。パーカーとアンウィンは「トンネル・バック」形式の住宅における裏の突出部を取り去り、「連続している全ての住宅において全ての居室とサービス部が一つの部屋の下に収められ、それらが自由となって表裏両面で太陽と空気に開放されるべき」^{註6}ことを説いたのであった。

「ブラッドフォードの職工用コテジ」（Artisan's Cottages at Bradford, c. 1898）^{図15}では、各戸の間口が狭いものの、便所や石炭置場を含む全てのサービス部が距形平面内に収められ、ニュー・イアーズウィックの住棟では「裏の突出部はどこにも見あたらない」^{註7}ことが実現されたのである。

平面における凹凸は、当然のことながら立面の凹凸に反映されよう。ピクチャレスク建築、特にそのコテジはゲーブル、ドーマー窓、煙突といった垂直の凹凸或いはポーチ、ベランダ、ペイウィンドウといった水平の凹凸を立面に施すことによって、光と陰の効果を演出した。パーカーとアンウィンの住宅立面構成は直接ヴォイジー（C. F. A. Voysey, 1857-1941）やベイリー・スコットの住宅の影響を受けているが、そこにピクチャレスク以来の水平、垂直の分節による光と陰の効果が意図されていることも忘れてはならないだろう。

何軒かの住戸が並列され一つの住棟となったものをテラス・ハウス或いはロウ・ハウスと言うが、その立面構成は独立住宅や半独立住宅の立面構成とは異なる。

註5) R. Unwin, 'Cottage Plans and Common Sense', *Fabian Tract*, No. 109, London, 1902, reprinted in W. L. Creese, op. cit., p.56.

註6) Ibid., p.59.

註7) B. Parker, 'A Lecture on Earswick Delivered Before the Town Planning Institute', October, 6, 1923, pp.4-5.

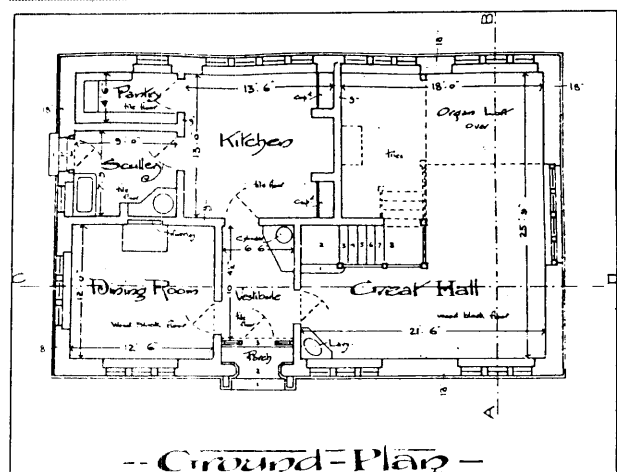


図13 ヒル・クレスト，パーカーとアンウィン設計，1896

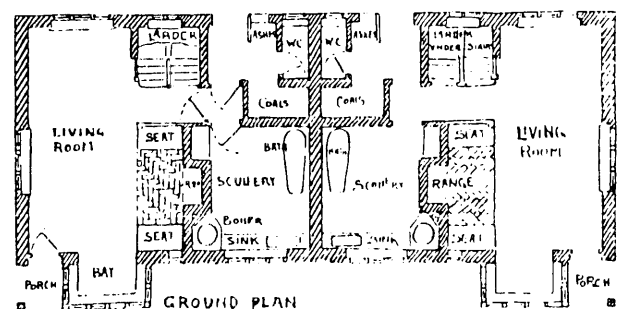


図14 「都市近郊のコテジ群」，パーカーとアンウィン設計，1903，住戸平面図

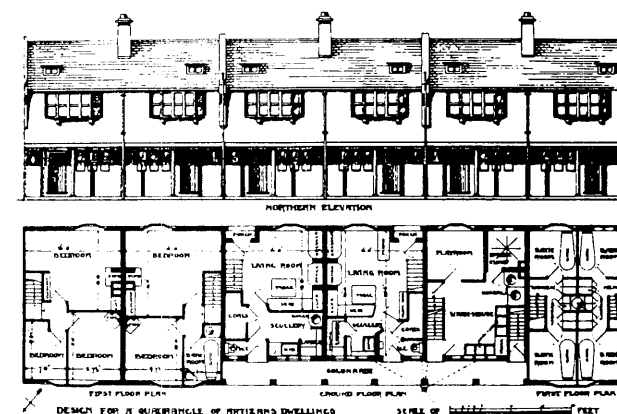


図15 ブラッドフォードの職工用コテジ，パーカーとアンウィン設計，c. 1898，住戸平面・立面図

ジョージ朝のテラス・ハウスでは同一の窓やエントランス・ポーチが規則正しく配列されるものが多いが、それを打ち破ったのがジョン・ナッシュであった。彼は多数の住戸が連続する住棟の中央部と両端部とをペディメント等で強調することによって、それと一つの建物に見せかけることに成功した^{図16}。このような手法を駆使して、ヴァナキュラー様式のコテージ群を一つの大邸宅に見せかけた例が、工業モデル・ヴィレッジの代表例ポート・サンライトに多く見られる^{図17}。パーカーとアンウィンの住棟立面構成も、そのような例は多い。例えばレッチワース、バーズ・ヒルの住棟群 (Nos. 9-27, Birds Hill, Letchworth, 1906) ^{図18}では、その中央住棟中央には住棟のスケールにそぐわない程大きなゲブル屋根が架けられ、住棟群の中心を明示しているのである。

第4章 パーカーとアンウィンの住棟配置

本章では、経済性、社会性、芸術性の三つの観点からパーカーとアンウィンの住宅集合の形式を考察している。

まず第一に、アンウィンの都市計画理論のスローガンともなった「1エーカーにつき12戸」という低密度開発の経済性について触れる。アンウィンの『過密によって何も得られない！いかに田園都市型開発が家主と借家人の益となっているか』(Nothing Gained by Overcrowding! Or How the Garden City Type of Development May Benefit Both Owner and Occupier, London, 1912)の中で、アンウィンは、現行法規下で許容されるほぼ最大限の密度、即ち1エーカーにつき34戸の密度をもつ「路地」(alley)型開発と、1エーカーにつき15.2戸の密度をもつ「スーパー・ブロック」(super block)型開発を比較し、後者が経済的に優れていることを指摘している^{図19}。

第二点、社会的観点から見た住宅集合の形式を論ずることは、一種のコミュニティ論に連なるだろう。アンウィンは、ラスキンやモリスと同様、中世村落に理想的なコミュニティ像を見出していた。そして中世村落の階級混合コミュニティと外観を適用することにより、現在単一の階級だけで占められている住宅地の単調さが解消されると考えていた。

第三点、芸術的観点から見た住宅集合の形式は、アンウィンが最も強調するところのものであった。アンウィンは言う。「芸術的に見れば、都市計画の成功は、建物のクラスター化即ち一方では単なるロウ・ハウスを避け他方では独立住宅を避けることに大部分依存している。」^{註8}しかも彼はその建物のクラスター化と、眺望上の効果という観点で捉え、「建築的に見れば、ある程度の建物の

註8) R. Unwin, *The Art of Building a Home*, London, 1901, in W. L. Creese, op. cit., p.53.

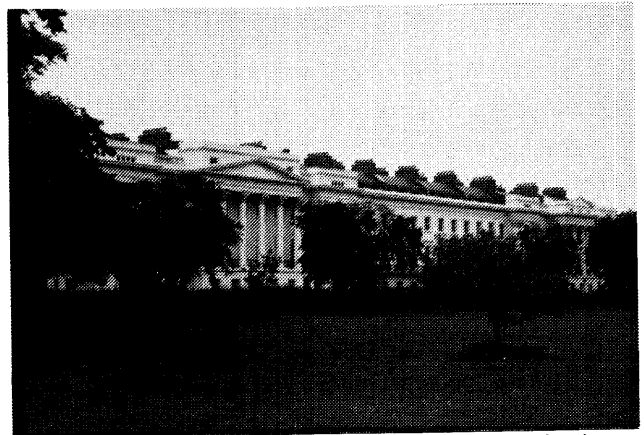


図16 コーンウォール・テラス, リージェンツ・パーク, ジョン・ナッシュ設計



図17 5戸連続住棟, ポート・サンライト, モーリス・B・アダムス設計, 1904



図18 バーズ・ヒル, レッチワース, パーカーとアンウィン設計, 1906

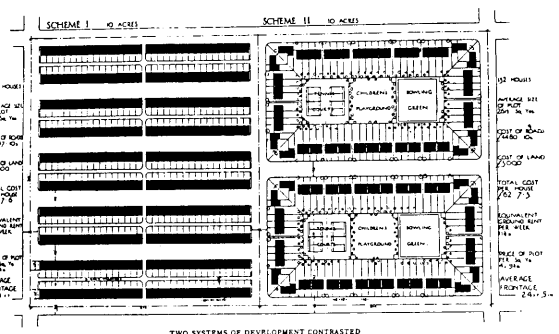


図19 「路地」型開発と「スーパー・ブロック」型開発の比較, アンウィン『過密によって何も得られない!』(1912)から

グルーピングは、良きストリート・ピクチュアをつくり出す為には必須であることは疑えない。」^{註9}と言う。その観点は、風景と一幅の絵として見たピクチュアレスク美学を継承していることは言うまでもない。

ここではアンウィンの住宅集合形式を1) 直線或いは曲線道路に沿った住棟配置2) クルドサック道路とクアドラング型住棟配置、3) 道路交差点を囲むバタフライ型住棟配置の3形式について述べる。

アンウィンは、直線道路に沿って住棟をセットバックして建て、その終結部に建物を配する必要があると言う^{図20}。何故なら「ストリート・ピクチュアを完成する為には、特に応じて道路に沿ったヴィスタを閉じることが望まれる。」^{註10}からである。反対に「関心をひくような終結部に通じていない道路においては、関心をひくようなものや変化を前景に導入するのが望まれる。」^{註11}道路の導入部に一種の「ゲート」を設けるのは、その一例であろう。

一方、アンウィンは曲線道路におけるストリート・ピクチュアの連続的变化という利点を認めながらも、それは「時折、道路片側の屋根ラインの透視画法のせいで、ストリート・ピクチュアの中央を対角線状に横切る不格好な線が生まれやすい。」と言う。^{註12}それを避ける為に、道路の屈曲部にクアドラング型に住棟群を配置し、その一部が道路上のヴィスタの軸線に正対する工夫をした^{図21}。

クアドラング (quadrangle) とは中庭の四辺或いは三辺を取り囲んだ建物を言う。それは修道院の平面型として発達、後に救貧院や学寮の平面にも応用された。例えば工業モデル・ヴィレッジのソルテアやブーンヴィルの救貧院もクアドラングである。しかし、アンウィンのクアドラング住棟に最も影響を与えたのはオックスフォードやケンブリッジの学寮であった。そして、このような平面型を住棟に応用することによって、住戸全体の統一感や道路に対するより大きなスケールが容易に得られたのであった。

アンウィンは、クアドラングを単一の住棟のみならず多数の住棟の配置にまで拡大解釈している。このような住棟配置はヴィレッジ・グリーンの方を取り囲む不規則な住棟配置に由来するのではなかろうか。アンウィンの初期のクアドラング型住棟配置は、「クレイトンの共同住宅」計画案 (Copartnership Housing at Clayton, undated)^{図22}やレッチワースの事例に見られるように全て不規則的である。それに対し、ハムステッド・ガーデン・サバーブのクアドラング型住棟配置は規則的である。このようなフォーマル化に影響を与えたのが、ジョージ朝都市計画の主要モチーフであるスクエアやクレセントであった。アンウィンは「田園都市の諸原理には拡散とセミ・デタッチドネスを要請するものではなく、バース

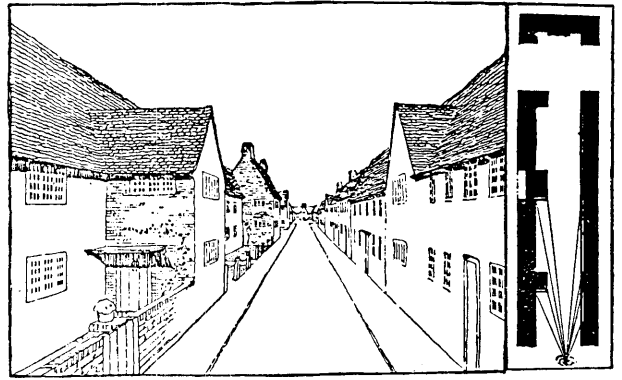


図20 直線道路に沿った住棟の分節、『都市計画の実践』から

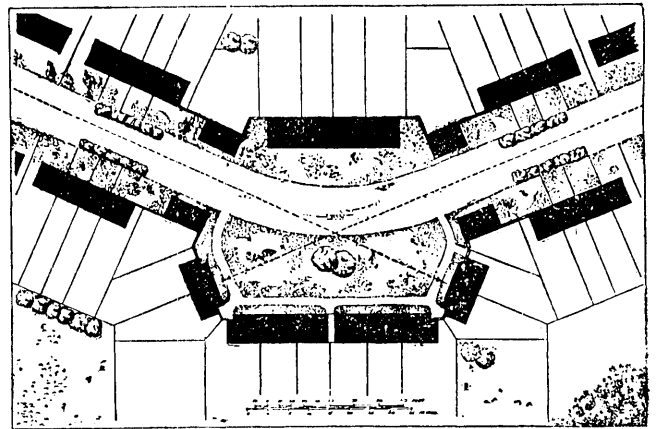


図21 曲線道路に沿った住棟配置例、『都市計画の実践』から

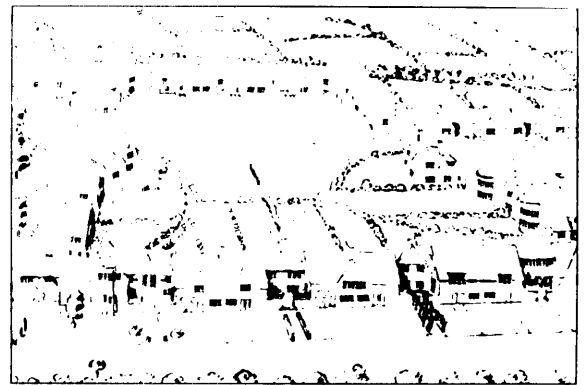


図22 クレイTONの共同住宅、パーカーとアンウィン設計

のクレセントやブルームスバリーのスクエア群と矛盾するものはない。」^{註13}と明言している程である。一方、このようなフォーマル化は、1906年の「ハムステッド・ガーデン・サバーブ・アクト」で幅の狭い道路、クルドサック道路、入隅部住戸が認められたことによって可能になったことも忘れてはならない。『都市計画の実践』に図

註9) R. Unwin, *Town Planning in Practice*, p.350.

註10) Ibid., pp.245-246.

註11) Ibid., p.350.

註12) Ibid., p.345.

註13) R. Unwin, address to section B, Architecture, Town Planning and Engineering, Royal Sanitary Institute, Portsmouth, July 11-16, 1938, pp.16-17.

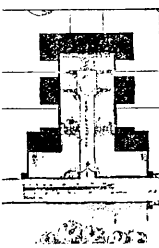
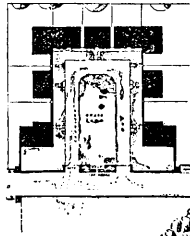
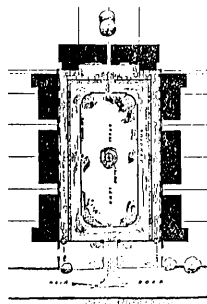
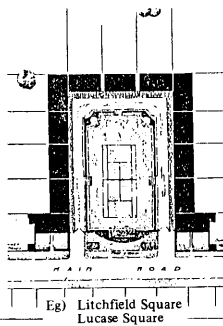
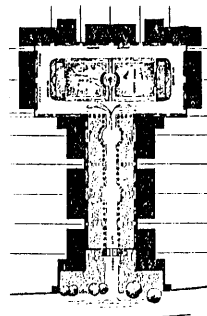
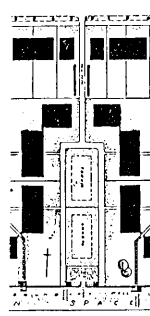
	three sided quadrangle			four sided quadrangle	a group of quadrangles
	detached house	semi-detached house	terrace house		
cul-de-sac					
circling carriage drive			 Eg) Litchfield Square Lucase Square	Eg) Orchard Waterlow Court	Eg) Corringham Road Heathcraft
combination of cul-de-sac and circling carriage drive		 Eg) Reynolds Close  Eg) Linnel Close	 Eg) Asmunds Place		

図23 アンウィンのクアドラングル型住棟配置とハムステッド・ガーデン・サバープにおける実例

示されたクアドラングル型住棟とハムステッド・ガーデン・サバープにおけるその実例の対応が図23に示されている。

アンウィンの都市計画において、道路交差点は特に重要な位置を占めている。そのことは「都市の効果の大半は、道路交差点の処理に依存している。」^{註14}というアンウィンの言葉からも推察せられよう。彼の道路交差点デザインの要諦は、交差点回りに入隅をもった広場をつくり、そこに進入する道路からのヴィスタを閉じること、即ち交差点回りに「図」として限定された広場を形成することに尽きる。彼は、建物による広場の包囲とヴィスタの閉鎖という手法をドイツ派都市計画から学び取ったが、道路や広場の形をより規則的なものに修正した。このようなフォーマル化には、ルネサンスやバロックの広場が参照されたことは言うまでもない。アンウィンはT字路、Y字路、十字路の他にカールスルーエのロンデル・プラッツを元にした変形十字路といった独特のデザインを考え出し、それをハムステッド・ガーデン・サバープで実現した^{図24}。その実現にあたっては、「ハムステッド・ガーデン・サバープ・アクト」による規則緩和に負う所

が大きい。

このような交差点広場を囲む住棟は、応々にして蝶が羽を広げたように両ウィングを広げた建物となる。そのような建物は、エドワード朝住宅建築で試みられたバタフライ・プランに由来する。ノーマン・ショウ (Richard Norman Shaw, 1831-1912)、プライア (E. S. Prior, 1852-1932)、ラッチュンス、ベイリー・スコット、或いは「北部アートワーカーズ・ギルド」のメンバーでありパーカーとアンウィンに大きな影響を与えたと言われるエドガー・ウッド (Edgar Wood, 1860-1935) はそれぞれバタフライ型住宅を実験している。その特異な平面では、日照・眺望を損なうことなく外部空間を囲いこむことができ、外観はシンメトリーであるにもかかわらずピクチュアレスクな変化が添えられるという利点があった。アンウィンはこのような利点を都市計画に関連付けることに成功した。つまり、三方を囲いこまれた外部空間を交差点広場の一部に利用しかつシンメトリカルな外観を道路上のヴィスタのターミナルとして利用したので

註14) R. Unwin, *Town Planning in Practice*, p.246.

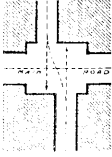
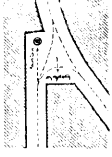
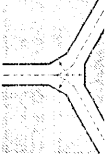
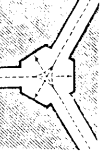
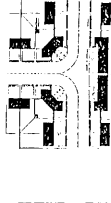
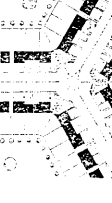
	Plaza (Figure-Ground)	right angles		oblique angles			
		T-shape	crose road	Y-shape		irregular cross road	
							
Plaza-buildings corner buildings set diagonally							
		 	 		 	 	 
		Eg) Hogarth/Addison	Eg) Meadway/ Heathgate		Eg) Hampstead Way/ Asmuns Hill	Eg) Hampstead Way/ Temple Fortune Hill	Eg) Willifield Way/ Temple Fortune Hill Eg) Hampstead Way/ Meadway

図24 アンウィンの交差点デザインとハムステッド・ガーデン・サバープにおける実例

あった。但しこのようなバタフライ型住棟の萌芽はポート・サンライトに見られる。

第5章 ハムステッド・ガーデン・サバープにおける住棟

本章では、ハムステッド・ガーデン・サバープの住棟を、同資料館に保存されている図面を基に詳論している。対象とする住棟は、ハムステッド・ガーデン・サバープの一つの特徴となっているクアドラングル型住棟2例と交差点を囲むバタフライ型住棟7例である。ここでは紙面の関係上、後者からはハムステッド・ウェイとミードウェイの交差点を囲む住棟を取り上げ、その分析の一端を紹介するに留める。

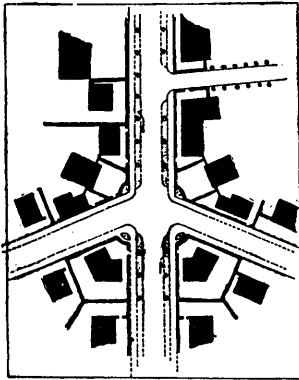
ハムステッド・ウェイとミードウェイの交差点を囲む住棟群は、「都市計画像の道路交差点に対する基本構想が、その回りの建物デザインを任された建築家によって修正されているが、構想の眼目は維持されているきわめて興味深い例である。」^{註15)}即ち、都市計画家アンウィンの案と実際の設計にたざざわった建築家ベイリー・スコットの案とは、六角形の交差点広場を形成するという意図

は同じであるが、各住棟の平面分節とその輪郭線が描き出す広場の形に違いが見られる。更にこのベイリー・スコットの住棟群は一棟が実現されたのみで、残る三棟はサットクリフによって設計し直された後建てられた。従って、ベイリー・スコット案とサットクリフト案とでも、各住棟の平面分節や広場の形が違ってきているのである^{註25)}。

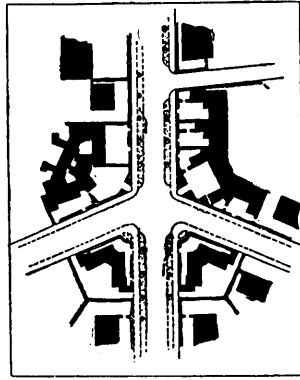
交差点南東隅を占める住棟1は、ベイリー・スコットによる唯一の住棟である^{註26)}。各住戸は北側にエントランスと廊下、南側に主要居室が一行に並びいわゆる北廊下型平面をもつ。立面はラフ・キャストの大ゲブル、同じくラフキャストの小ゲブル、ハーフチンバー造の小ゲブル、羽目板横貼りのパビリオンによって分節されており、ハムステッド・ウェイの軸に正対する住棟立面中央部は、その軸に対してシンメトリカルに構成されている。しかし、その立面の分節と住戸の分節とはくい違っているのである。交差点北東隅を占める住棟2では、住棟の南側に道路が位置する。その為、ベイリー・スコット

註15) Ibid., p.338.

a. アンウィン案



b. ベイリー・スコット案



c. 現状

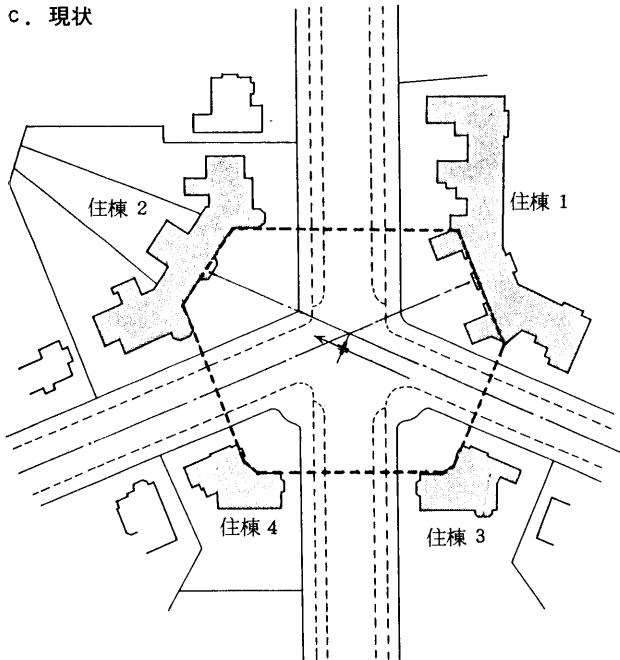
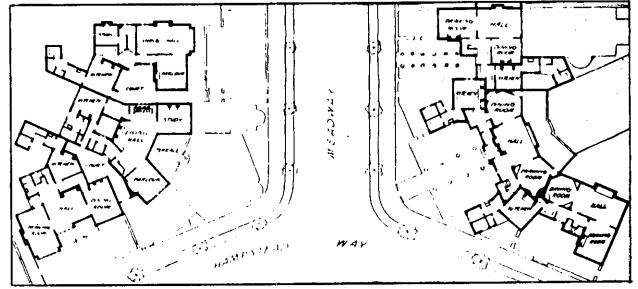


図25 ハムステッド・ウェイとミードウェイの交差点を囲む住棟群

トは住棟を道路から大きくセットバックさせ、前庭を主庭園とした。各住戸の主要居室はその主庭園に面して配されるが、エントランスは住戸側面にとられた中庭に面している。その内、ハムステッド・ウェイの軸に正対する中央住戸は、典型的なバタフライ・プランを持つ。又、大ゲートルのみによるその立面の分節は、住棟1のそれよりは穏やかである。実現された住棟2^{図27}では末広がり

に張出すウィングが中央住戸ではなく両端の住戸に属している為、中央住戸前庭により大きな外部空間が囲いこまれる。即ちより大きく交差点広場がとられることになる。各住戸では道路側にエントランスがとられ、又、主要居室の構成もベイリー・スコットの住戸のそれとは異なる。住棟3、4は交差点の南西隅、北西隅を占める独立住宅であり、ミードウェイの軸に対して鏡像関係にある。この左右逆転した一对の住宅がミードウェイのヴィスタを縁取る「ゲート」を形成している。ベイリー・ス

a. 住棟1、2の一階平面図



b. 住棟1透視図

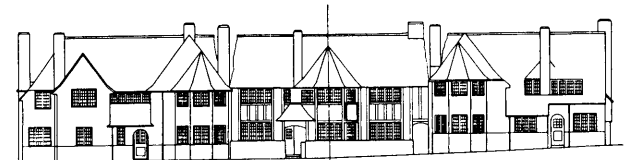


c. 住棟2透視図



図26 ベイリー・スコットによる住棟1、2案

a. 正面



b. 一階平面

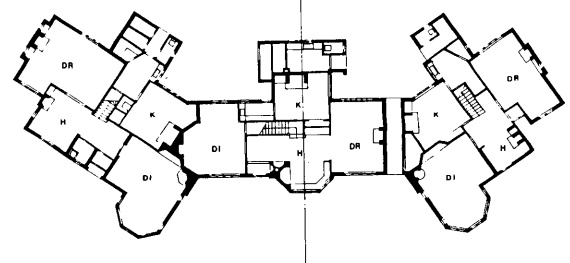


図27 住棟2

コットの住宅^{図28}は典型的なバタフライ・プランを持つ。即ち、その末広がりウィングは前庭では交差点広場の一部となる外部空間を囲うと共に、背面でもくさび状の庭園を囲いこんでいるのである。それに対して実現された住宅^{図29}は、北廊下型平面にLの字型に屈曲する「偽りの正面」(false facade)が付加されたものと見做されよう。その正面は交差点広場の一部を囲いこんではいるが、背後の主要居室の一例配置とは全く無関係なのである。

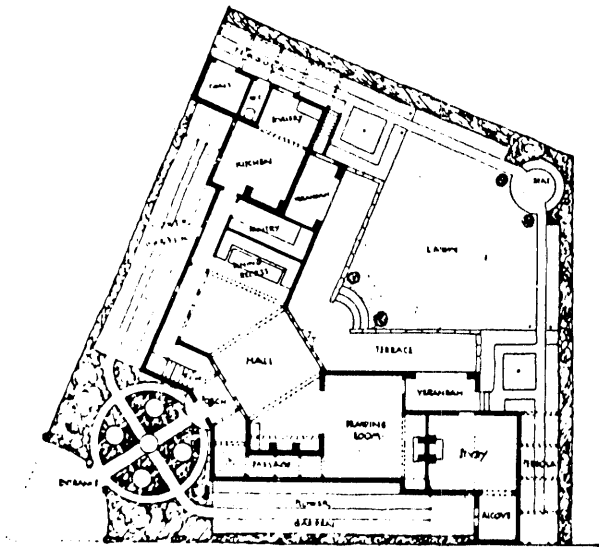
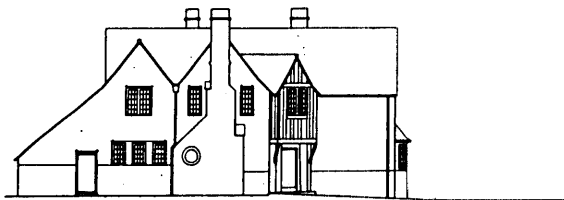


図28 ベイリー・スコットによる住棟3, 4案, 一階平面図

a. 東面



b. 一階平面図

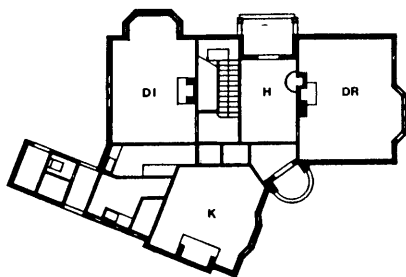


図29 住棟3

<研究組織>

(主査) 香山 壽夫 東京大学工学部 助 教 授
委員 片 木 篤 " 大学院博士課程